

巻 頭 言

日本大学理工学部数学科

平田 典子

昨年十月に佐武一郎先生のご訃報に接し、寂しい思いをいたしております。

佐武先生とは 1980 年代後半に整数論の研究集会で初めてお目にかかりました。若く駆け出しの頃の私の小さな結果に関し、声をかけ励ましてくださった、数少ない日本人数学者の一人です。日本の学問の大きな流派に所属していなかった浅学非才の私が、専門家の意見の伝達という形であったその一言にどれほど勇気づけられたかは、表現のすべもないままです。文字通り、意欲以外には何一つ持っていなかった私に対しても、いわゆる「バイアス（偏見）」を持たないで接して下さったことが直に感じられました。先生のご冥福を心よりお祈りする次第です。

マサチューセッツ工科大学(MIT)は、皆様をご存知のアメリカの理工系大学ですが <http://web.mit.edu/facts/enrollment.html> によりますと学部の女子学生が 2013～2014 年現在、全体の約 45%ということです。この MIT の女性教授 Nancy Hopkins 氏のご友人でおられる大坪久子先生から次のことを教わりました。「MIT の女性教員たちは、自分たちが学内で何となく窓際に追いやられていることに、薄々感づいていた。研究業績も研究費獲得も着実で、国の委員会等でも責務を果たし、学術的賞の受賞者等が多いにも拘らずである。分子生物学者 Nancy Hopkins 氏の呼びかけに応じ調査を開始した MIT の女性教授たちは、女性教員が人事配置・研究室設備・学内資金等で低く扱われていることを、データに基づいて明らかにしていく。1990 年代のこの活動はその後のアメリカの女性研究者支援を進展させることになった。」

参考 URL: <http://web.mit.edu/fnl/volume/184/fnl184.pdf>

http://web.mit.edu/faculty/reports/pdf/women_faculty.pdf

さて 2013 年 11 月より 2014 年 10 月まで、日本数学会は男女共同参画学協会連絡会という組織の幹事学会を担当いたし、私は 1 年間その委員長を拝命しておりました。このたび漸くその任を降り、ほっといたしております。この会は理工系の研究者から成る 87 学会・協会（平成 27 年 1 月 16 日現在、参加学協会会員総数およそ 46 万人）の男女参画関連委員の総合体として女性研究者の実態調査アンケートや上記の MIT のようなデータを集めて解析し、政府各所に提言や要望を提出する等の活動をしております。2012 年末に日本数学会会員の皆様からもご協力いただいた「第三回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」は、理工系分野での回答者総数 16,314 名によるものでした。

報告書および英語版サマリーは <http://www.djrenrakukai.org/enquete.html>
にあります。この場を借りまして、ご協力頂いた皆様に改めて御礼申し上げます。

政府の目標に掲げられた、2020年までに指導的地位に占める女性の割合を30%にするという数字「202030」ですが、この「30%」の由来はハーバード大学教授の Rosabeth Moss Kanter 教授によるカンター理論の「黄金の三割」に負うのだそうです。これは少数派であっても構成員の「30%」を占めれば、組織の意思決定に影響力を持つようになることとみなされる社会学の理論とのことで、研究教育機関・企業・官庁等の意思決定の場で30%以上の女性にテーブルにつかせて下さいという運動は、ここに端を発しています。男女共同参画が各所で謳われて久しいですが、統計において日本は文系理系合わせても研究者人数における女性割合が14.4%と、現時点で主な先進国中のビリに甘んじております。緩やかに増加傾向にはありますが、しかしビリから2位の韓国からは益々引き離され、諸策講ずるようになって見えても他国の改革スピードには追いつけないでおります。
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h26/zentai/pdf/h26_genjo3.pdf
<https://womenandmath.files.wordpress.com/2007/09/statisticwomen.pdf>
<http://www.aauw.org/files/2013/02/Why-So-Few-Women-in-Science-Technology-Engineering-and-Mathematics.pdf>

数学という学問においては客観的評価が成り立ちやすいと信じてはおりますが、数学に関わる人々を育てる日本の大学等における数学・数理科学の場ではいかがでしょう。例えば日本数学会の公的な委員会、各分科会の運営委員会において、委員もしくは指導的地位にある女性の割合はどうでしょうか。第二次世界大戦後の裁判傍聴記録をもとに「悪の凡庸さ」について著した哲学者 Hannah Arendt による「集団の多数決に寄りかかる人こそ大きな過ちを犯している」という言葉が連想されるような、女性の評価を低めるバイアスは、数学に関連する研究教育機関等にはあってはならないと考えます。また女性の優れた大学院生を育てておられる数学の先生が決まった人に偏り、なかなか広がらないように感じられるのは、偶然でしょうか。

数学の考究において独創性を追求する精神は、全体主義に倣うことの対局に位置すると思われまふ。数学の才能に恵まれる人は男女問わずさほど多い訳ではないでしょうし、評価は実力本位であるべきですが、研究教育活動を行うことの許される日本の女性の割合が先進国のそれに追いつけないのも不思議です。2020年まであと5年である2015年を迎えた今日に、数学を志し、数学に関わる日本の女性の位置が、先進国に引き離されてばかりではないことを示すような、新たなデータの出現を願っております。